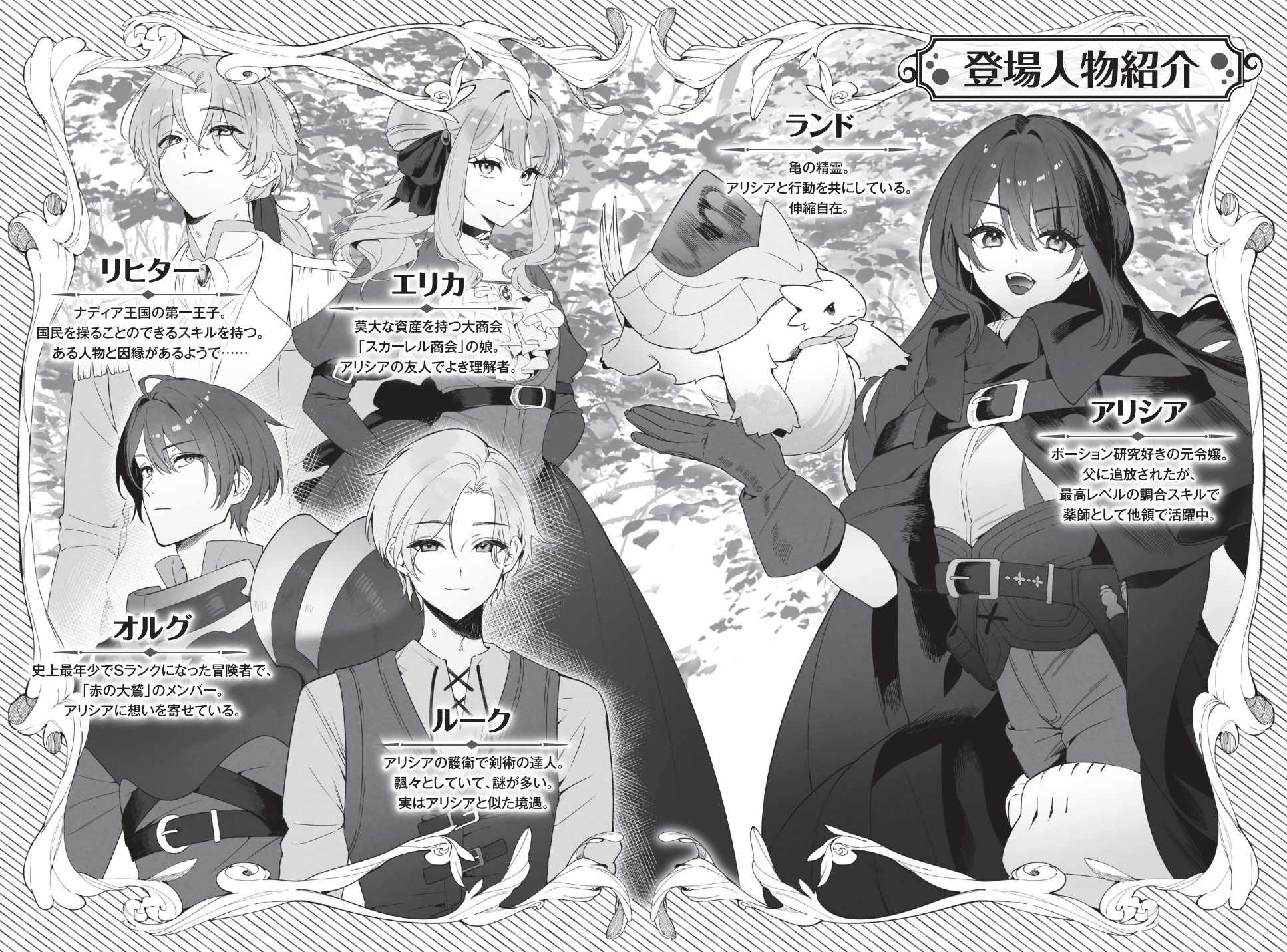
私を追放したことを後悔してもらおう3

～父上は領地発展が私のポーションのお陰と知らないらしい～

登場人物紹介



ランド

亀の精霊。
アリシアと行動を共にしている。
伸縮自在。

アリシア

ポーション研究好きの元令嬢。
父に追放されたが、
最高レベルの調合スキルで
薬師として他領で活躍中。

リヒター

ナディア王国の第一王子。
国民を操ることのできるスキルを持つ。
ある人物と因縁があるようで……

エリカ

莫大な資産を持つ大商会
「スカーレル商会」の娘。
アリシアの友人でよき理解者。

オルグ

史上最年少でSランクになった冒険者で、
「赤の大鷲」のメンバー。
アリシアに想いを寄せている。

ルーク

アリシアの護衛で剣術の達人。
飄々としていて、謎が多い。
実はアリシアと似た境遇。

目次

私を追放したことを後悔してもらおう3
～父上は領地発展が私のポーションのお陰と知らないらしい～ 7

番外編　雨のち晴れ 213

私を追放したことを後悔してもらおう3

～父上は領地発展が私のポーションのお陰と知らないらしい～

プロローグ

ナディア王国首都ナディリア。

その中心に位置する王城の執務室で、壮年の人物が書類に目を通している。目元や頬には年齢相応の皺が刻まれ、金髪にはいくつか白の差し毛が混ざっているが、彫刻のような彼の外見の美しさが損なわれることはない。

エドワード・デル・ナディリア――ナディア王国の王である。

彼が読んでいたのは、ナディア王国南部で発生した災害に関する報告書だった。南部に広がる巨大な森におぞましい怪物が現れ、領地一つが滅びかけたという一件。そう、呪詛ヒュドラがプロミアス領に現れた事件である。

エドワードは机の上に置かれたベルを鳴らした。これは魔道具であり、距離の制限はあるが、対の魔道具を持つ人物に直ちに連絡がいくものだ。もともと近くにいたのか、すぐに呼び出した人物が執務室のドアを叩いた。宰相のハリス・ザイオンだ。

「お呼びですか、陛下」

「ハリス。先日の呪詛ヒュドラの一件を覚えているか？」

宰相を務めるだけのことはあり、ハリスは国王の問いにすらすらと答えた。

「プロミアス領……いえ、今は旧プロミアス領ですか。そことシアン領に位置するフォレス大森林にて、災害級の魔物である呪詛ヒュドラが発生した事件ですな。旧プロミアス領の兵士たちと、シアン領にいた『灼剣』を含む冒険者たちがこれを討伐。犠牲者は少なかったものの、初動の失敗や魔物除けポーションという品の使用を認めなかったことなどから、前領主トマスが国外追放となっています」

エドワードは頷く。

「一見すれば強力な魔物がその地の者たちによって倒されただけだが、圧倒的に犠牲が少ない。呪詛ヒュドラは単体で都市一つを滅ぼす魔物であり、前領主の失態まであったにもかかわらずだ。しかも報告書によれば、汚染された大地まで、すでによみがえりつつあるという」

「陛下はお気になさっているのですね。かの調合師のことを」

「うむ――」

前領主トマスの次女、アリシア。

調合師である彼女は、まだ十代であるにもかかわらず、呪詛ヒュドラ討伐に大きく貢献した。旧プロミアス領の暫定領主からの報告書には以下の記述があった。

（略）

また、今回の事件解決にあたって多大な貢献をした、調合師アリシアの行いに触れないわけにも

参りません。
アリシアの作った解呪ポーションによって、呪詛ヒュドラの凶悪な呪いに侵された兵士数十人が半日かからず完治。
呪詛ヒュドラの戦闘中には大量に作った解呪ポーションによって雨を降らせ、戦闘員を癒やし続ける。
希少な「賢者のミント」が必要となる魔術ポーションを複数用いて戦力を強化し、最後は自らがそれを飲んで雷撃によって呪詛ヒュドラにとどめを刺す。
それらにとどまらず、フォレス大森林の魔物から旧プロミアス領を守るだけの魔物除けポーションを開発、一人で量産していたこと、汚染された大地を元に戻すためのポーションも一人でまかなったこと、大商会のスカーレル商会長の娘や「灼剣」オルグと個人的な交流を持っていることなど、特筆すべきことがあまりにも――（略）

エドワードは遠い目をした。
「……気にするなと言うほうが無理ではないか？」
「もはや現実のこととは思えないほどの功績ですね……」
なんだこれは。どこのおとぎ話だ。これが十七歳の少女のやったことと言われて一体誰が信じられるというのか。
さらに暫定領主の調査により、アリシアが用いたポーションのランクはそのいくつかが、ランクVであるとわかっている。ランクVのポーションとなれば作れる者は決して多くない。
「どのようにいたしますか、陛下。宮廷錬金術師団に加えるというのも選択肢の一つかと思いますが」
「まずは調査せよ。思想、日頃の活動など、徹底的に調べあげるのだ」
「承知しました」
ぽつりと、エドワードはこう付け加えた。
「優秀であればあるほど、慎重に扱わねばならぬ。……まして『あやつ』がこのことを知れば、厄介なことになるやもしれん。必ず秘密裏に行え」
エドワードが示す人物の顔は、ハリスにもすぐに思い浮かべることができた。第一王子、リヒター・デル・ナディリア。彼がアリシアに興味を持つようなことは避けたい。
「重々、理解しております」
ハリスは深く同意するのであった。

第一章

「あなたが店主さん？　ちょっとポーションのことで聞きたいことがあるんだけど」
「はい。どのポーションについてですか？」

私――調合師のアリシアが、商品補充を兼ねて屋敷にある工房から「緑の薬師」の様子を見に行ったところ、商品の一つを難しい顔で見ていた女性客に話しかけられた。
「この『洗浄ポーション』についてなんだけど――」
女性客の質問を聞き、私はそれらについて一つずつ答えていく。
旧プロミアス領の暫定領主、オールレイス卿との会談から半月ほど、私たちは「緑の薬師」に戻ってきて、またいつも通りの日々を過ごしていた。ルークが会計、ランドが防犯兼マスコット兼簡単な質問対応、レンとブリジットは工房でポーション作成という布陣である。
「……という感じですね」
「そう、よくわかったわ。どうもありがとう！　それじゃあこの洗浄ポーションと、それからヒールポーションも買っていこうかしら」
「かしこまりました。お買い上げありがとうございます」
私に質問していた女性客は、気になっていた点が解決したのか、質問していた洗浄ポーションだけでなく他のポーションもいくつか買っていってくれた。会計を終えて去っていく女性客を、最近ようやくできるようになった営業スマイルで見送る。
「アリシアもずいぶん接客に慣れたねえ」
「うむ。堂々とした対応じゃったな」
「二人とも、ありがとうございます」
ルークとランドから見ても、私の接客に不安な部分はなかったようだ。そう言われてほっとする。

夜な夜な表情作りを練習した甲斐があったかもしれない。
さて、そんなことを話していると再度店の扉が開いた。
「アリシアちゃん、いるかい？」
「はい、いらっしゃいま――」
やってきた人物に私は目を見開いた。
「ディーノさん!?」
「おうよ。久しぶりだなーアリシアちゃん！　元気そうでなによりだ！」
店に入ってきたのは、洒脱な雰囲気を放つ、くすんだ金髪の男性。
いくつかボタンが開けられたシャツからは鍛えられた胸板がわずかに覗き、耳飾りや派手な色のシャツが目を引く。
「アリシア、知り合いかい？」
ルークに尋ねられて頷く。
「はい。この方はエリカのお父さんです」
「ディーノ・スカーレルだ。よろしく！」
ニカッと白い歯を見せて挨拶するディーノさんに、ルークは驚いたように言う。
「エリカさんの父親って……もしかして、スカーレル商会の商会長？」
「ああ。うちの娘がいつも世話になってるな」
ルークの言う通り、ディーノさんはスカーレル商会の長だ。この人がこの街にやってきたという

ことは……
「もしかして、エリカに会うためにこの街に？」
「それもないとは言わんが、別件だ。アリシアちゃんに依頼があってきたんだよ。少し時間をもらえるかい？」
「それは構いませんが」
ディーノさんが私に直接依頼を……一体どんな用件だろうか。
「……んん？」
「それじゃあ屋敷の応接室に……ディーノさん、どうかしましたか？」
「なあ、アリシアちゃん。あの金髪のやつ……」
「ルークがどうかしましたか？」
ディーノさんがカウンターの内側にいるルークをまじまじと見て、驚いたような顔をしている。……もしかして知り合いとか？　一方ルークはそれに気付いているのかいないのか、視線は斜め下のランドに向けられている。その表情は私やディーノさんの位置からはうかがえない。
「……いや、まあいいや。なんでもない」
「それならいいですが」
よくわからないけれど、ディーノさんがそう言うなら気にしないほうがよさそうだ。大事なことならあとで改めて話してくれることだろう。
接客をルークたちに任せ、屋敷の応接室に案内する。見知らぬ相手との商談ならランドかルークの最低どちらかに護衛を頼むけれど、今回は知人ということで私一人での対応だ。
応接用のソファに座ると、ディーノさんはまず私を気遣うように言った。
「今更だけど、体調とかは平気か？　最近プロミアス領のほうでいろいろあったって聞いてるぞ」
いろいろ、というのは例の呪詛（カース）ヒュドラのことだろうか。
「大丈夫です。そっちはもう解決していますし、土壌の後始末なんかも済んでいますから」
「いや、領地の心配もあるけど……アリシアちゃんのほうだよ。トマス様は国外追放になっちまったんだろう？」
「それも、もう整理はついています。ご心配には及びません」
「……そうか。アリシアちゃんがそう言うなら俺がとやかく言うことじゃねえな。でも、なにか困ったことがあれば遠慮なく相談してくれよ。俺はアリシアちゃんのこと、もう一人の娘みたいに思ってるからな」
「はい。ありがとうございます」
心配してくれるディーノさんに嬉しく思いつつ、私は小さく笑ってそう答えた。
王都にいた頃、エリカと友人になったことをきっかけに、ディーノさんとも知り合った。母を亡くしたばかりの私に親身になってくれた彼を、なんとなく親戚のように思っている。エリカと同じく、この人には頭が上がらない。
「エリカにはもう会いましたか？」
「さっき会ってきた。新事業の利益勝負でこてんぱんにしたら、顔を真っ赤にして地団駄を踏んで

たな」
「あ、その競争はまだやっているんですね」
ディーノさんは定期的にエリカと同時に新しい事業を始め、期限を決めて売り上げを競っている。エリカを一人前の商人に育てるため、という理由だったはずだけれど、エリカが支部を任されるようになってからもそれは続いているらしい。
確かエリカ側にはハンデがあったと思うけれど、それでもエリカがディーノさんに勝てたことはまだないはず。今回もさぞ悔しがっていることだろう。今頃リベンジに向けて燃えているんじゃないだろうか。
「エリカのことはいいとして、アリシアちゃんへの依頼についてだ」
「どんな依頼ですか？」
「ふっふっふ。これはまだ商会の中でも、ごく一部の者にしか明かしてない新事業に関わる話なんだけどな」
ディーノさんは両手を組んでわずかに身を乗り出した。にやりと不敵な笑みを浮かべるその姿は、高利貸しのようにも、悪だくみを持ちかける少年のようにも見える。そんなディーノさんを見ていると、不思議と話に引きつけられてしまうのだ。
「アリシアちゃん。――俺と一緒に流通の歴史を変えないか？」
「……え？」
なにやら笑顔でとんでもないことを言っていませんか、この人。

「私になにをさせようと？」
「ポーションの作成……というか開発だな。簡単に言うと、水竜の餌についての相談だ」
「水竜の餌？」
ポーションから急に話が飛んだように感じる。首を傾げる私にディーノさんは胸元から地図を取り出し、それを使って詳しい説明を始めた。
「俺たちのいるナディア王国の西には、海を挟んで別の大陸がある。向こうに行くには海を渡るしかないが、簡単にはいかない。理由は知ってるか？」
「西の大陸との間にある海には、絶えず『渦』が発生しているから、ですよね」
「ああ。無策で渡るのはまず無理だ。おかげで西の大陸との交流はお世辞にも盛んとは言えねえな」
西の大陸とこの国の間の海域には特有の魔力の流れがあり、大きな渦がいつも発生している。ここを普通の船で越えようとすれば、十隻に八隻は沈んでしまうとか。そのためうちの国は西の大陸の国々とあまり接点がない。
「だが逆に言えば、そこを渡れるようになれば大きな商売になるだろう。そのためにうちでは今、水竜――水棲の竜型の魔物を調教してる」
「そんなことができるんですか？」
「【テイム】ってスキルがある。それを使えば可能だ。珍しいスキルではあるけどな」
「それはすごいことだと思いますが……水竜と渦の突破にどんな関係が？」

「水竜には特殊な能力があってな。あいつらは自分の近くの水を操ることができるんだ。それを利用すれば、厄介な渦も難なく突破することができる」

ディーノさんの説明によると、実はすでに水竜に船を引かせて渦を越える試みは成功しているらしい。まさかもう試したあとだとは。

「よくそんなことを試しましたね……」

「部下にも死ぬほど止められたよ。『商会長になにかあったらうちはどうなるんですか』って」

「ディーノさんがやったんですか!?」

「スリルがあって最高だったぜ」

ディーノさんが【テイム】のスキルを持っているなんて話は聞いたことがないから、おそらくスキル持ちの部下に水竜を制御させて実行した、という意味だろう。久しぶりに会うから忘れていたけれど、そういえばこういう人だった。破天荒というか、自由というか……こういう行動力のある人でないと大商会の長は務まらないんだろうか。

「話を続けるが、水竜に引かせた船で商売をするにあたって問題がある。水竜ってのは偏食で、決まった種類の生魚しか食わねえんだ。だから航海中にそのへんの海で餌を補充するのは難しい。けど、生魚なんて簡単には持ち運べねえ」

「【氷魔術】のスキルで凍らせるのは……さすがに無理がありますか」

「ああ。魔術系スキル持ちは貴重だし、特に氷属性は需要が高い。それを何人も雇うってのは、できなくはねえが……まあ採算が合わないな」

腕組みをしながら言うディーノさん。魔術系スキル持ちはそもそも数が少ないし、炎や水といった属性魔術や回復魔術など、使い手がいくつもの種類に分岐してしまう。特定の魔術系スキルを持っている人間を集めるのはとても難しいのだ。

特に氷魔術のスキル持ちは南大陸で非常に重用されて稼げることから、そちらに流れることが多い。このあたりでも大きく稼げる宮廷魔術師などの仕事もあるけれど、その職に就く人たちの協力を得るのはなおさら簡単じゃないだろう。

「つまり、生魚を長期間保存するためのポーションを作ればいいんですね？」

「ああ。魚はだいたい五日間保存できればなんとかなるはずだ。簡単じゃないのは重々承知だが、これ以上船での移動時間を短くするのが難しくてな……」

「五日間ですね。わかりました」

ディーノさんにはお世話になったし、エリカには現在進行形でいろいろと助けてもらっている。恩を返す意味でも依頼は受けさせてもらおう。

「助かるよ。それで、報酬についてだが……アリシアちゃんはお母さんのかかっていた病気を治すためのポーションを開発しようとしてるんだって？」

私はぎくりとした。

「な、なぜそれを？」

「ふっふっふ、商人の情報網を舐めちゃいかんよ、アリシアちゃん。最近は貴重な素材の入手方法をいろいろと探っていたみたいじゃないか」

プロミアス領――今では旧プロミアス領だけれど――が平和になった今、次の私の目標はお母様の命を奪った病を根絶することだ。しかし既存の研究の中には、その病を治すポーションの手がかりはなかった。

だから私は研究の進んでいない、稀少素材を用いたポーションの研究をしようと、薬師ギルドや冒険者ギルドで情報収集をしていたのだけれど……どうやらディーノさんはそれを知っているようだ。なんという情報網……

「アリシアちゃんがまだ扱ったことのないような稀少素材を報酬として渡す。それならどうだ？」

「……念のため、その素材の名前を聞いても？」

「『ビーストフラワー』ってやつだ。南部の島国で偶然見つけた魔力植物だな」

ビーストフラワー。書物で読んだことはある。確か絶滅しかけている魔力植物で、それを用いたポーションの研究は途中で止まっていたはず。それなら私の求める素材である可能性がある。

こんなものを即座に提示できるあたり、改めてディーノさんがやり手の商人であることがわかる。

「わかりました。そういうことなら、喜んで協力させていただきます」

「よし、交渉成立だな」

そういうわけで、私はディーノさんの依頼を受けることになった。

「これが用意してきた素材だ。この中にあるものは好きなだけ使ってくれていい」

「おお……」

店の前に停められていた馬車の荷台の中身を見て、私は唖然としてしまう。

ディーノさんは私にポーション作成の依頼をするにあたり、ポーション作りに必要な素材を提供すると申し出た。店の前に停まる荷馬車には、大量の魔力植物が載せられていた。中には滅多に手に入らないような稀少な素材も交ざっている。

「なにが必要かわからねえから、とりあえず適当に詰め込んできた。足りなくなったら言ってくれればまた補充する」

「こんなに使ってしまっていいんですか!?」

「おうよ。それだけ今回の仕事には価値があると思ってるからな」

ディーノさんが新たに始めようとしている、水竜を用いた海運事業。その実現に向けて、ディーノさんはあらゆる手段もいとわないつもりのようだ。

「期限は……そうだな。三か月でどうだ？」

「三か月、ですか」

「新しいポーションを開発するんだ。時間もかかるだろうが、アリシアちゃんの能力を見込んで短めに設定させてもらった。できるか？」

ディーノさんは鋭い目で私を見た。他にも様々な事業を抱えているスカーレル商会のトップである彼からすれば、時間はなにより貴重な財産だ。無制限に私に時間を与えることなんてできないだろう。

けど……
「あの、明日にはできますよ」
「えっ」
私が言うと、いつも余裕そうなディーノさんが珍しく素で驚いた声を発した。

ディーノさんが「マジで……？　え、本当に明日できるの？　うちの調合師たちでも匙投げたんだよ？」と繰り返すのを大丈夫ですと退け、レンたちに手伝ってもらって材料を屋敷の裏手に運び込む。
ちなみにディーノさんは仕事があるとかで帰っていった。
「……で、なんだよこの厚着は」
「あ、暑いですわ……」
レンとブリジットが呻くように言う。
二人には厚手の上着を着てもらっている。この辺りは一年を通して多少の寒暖差はあるけれど、基本的に気温の幅はあまり大きくない。一年で一番暑い時期だろうと一番寒い時期だろうと、シャツと薄手の羽織もの一枚で過ごせてしまうのがこの地域だ。そんな中、レンたちが着ているのは北の地方の厳しい寒さに対応した上着なのだから、暑くないわけがない。
「仕方ないんです。必要なことですから」

「いや、お前は普通の格好じゃねーか」
「私のことは気にしないでください」
私はレンの言う通り、いつも通りの服装だ。
「もう意味がわからん」
「汗が、汗が止まりませんわ」
「……やっぱり二人とも、工房で待っていたほうがいいのでは？」
私が言うと、レンとブリジットは首を横に振った。
「アリシアを一人で放置するほうが怖い。わざわざ屋外でやる下処理なんて、なにが起こるか予想がつかないからな……」
「私はお姉さまがどんな作業をするのか興味がありますわ！」
レンはぞっとしたように、ブリジットはにこやかにそんなことを言う。
まあ、二人とも見たいなら拒否する理由はない。いつまでも二人に暑い思いをさせるのは申し訳ないので、すぐに作業に移る。
「で、どんなポーションを作るんだよ」
レンが尋ねてくる。
「『冷却ポーション』というものです。まあ見ていてください」
必要な材料は以下のものだ。

・キリハキダケ
・火炎草
・ヒクイ草

魔力水をはじめ、他にもいくつか必要なものがあるけれど割愛する。
まずはキリハキダケの下処理。魔物除けを作るときと同じく、軸から水袋を取り除く。

スッ、ブチブチブチッ……

ナイフでキリハキダケの軸を切り裂き、中から水袋を取り出し廃棄用の袋へ。水袋以外の部分は、たっぷりの魔力水が待つ調合用の瓶の中に入れる。
次は火炎草とヒクイ草。これは両方同時に使う必要がある。
最初に、地面にスコップで深さ五十センチほどの穴を掘る。
その底に根つきのヒクイ草を植え、事前に用意しておいた『爆薬ポーション㈢』を――
「おい待てアリシア！　お前それ爆薬ポーションじゃないか⁉」
「二人とも、少しだけ伏せていてくださいね」
「危険物を持ったままそんな普通のトーンで言うなよ！　なにをするつもりなのか説明してくれ！」
「レン様、早く伏せませんと」

「お前も当然のように従ってるんじゃねえ！」
なかなかレンが伏せてくれない。
少し心配ではあるけれど……まあ、それなりに距離はあるから大丈夫だろう。私は穴の中に爆薬ポーションを放り込んだ。
「ちょっとだけ揺れますよ」

ドォンッ！

「うおっ⁉　や、やりやがったあいつ！」
ヒクイ草の待ち受ける穴の中に爆薬ポーションを放り込む。私が穴を掘ったのは爆薬ポーションの被害を抑えるためだ。工房の中で爆薬ポーションなんて使ったら大変なことになってしまう。
爆発が起こった直後、穴の中からにょきにょきと緑色のツルが伸びてくる。それらは絡まり合って一本の木のようになると、その最上部に幅一メートルほどもある花を咲かせた。ツルの一部は中心にある茎の束から分離し、触手のように不気味な動きを見せている。
「な、なんですのこの植物……？　って、寒い！　急に寒くなりましたわ！」
「わざわざおれたちに厚着させたのはこのためか……」
巨大植物が現れた瞬間、周囲の気温が下がり始める。
せっかく立ち会っているのに、目の前の光景の意味が伝わらないのもなんだから、簡単に解説し

ておこう。
「このヒクイ草は、文字通り火を食らって――厳密には炎や熱を取り込んで成長する特徴があるんです。普通は麦と同じくらいの高さまでしか成長しませんが、爆薬ポーションを用いて大量の熱を一気に与えることで、その上限を超えることができます。この状態のヒクイ草は周囲から熱を奪い、あたり一帯を涼しくしてしまうんですね」
普通のヒクイ草は、せいぜい触るとひんやりする程度。
しかし爆薬ポーションで性質を強化することにより、より強い冷気を発するのだ。
ヒクイ草の扱いにおける裏技のようなものである。
『……』
「お、おい。なんかツルが妙にアリシアのほうに向いてないか？」
「活性化したヒクイ草は熱を求め、周囲の動物に襲い掛かる性質がありますから」
「それヤバいだろ!?」
「大丈夫です。こんなときのことを考えて――はいっ」
『……！』
私は用意していた火炎草をぎゅっと握って刺激を与えてから、真横に放り投げた。刺激を受けた火炎草は地面に落ちると同時に燃え上がり、ヒクイ草のツルはより強い熱を求めてそっちに向かう。
火炎草を用意したのは、こうやって囮にするためだ。
あとは火炎草に夢中になっている間に、ヒクイ草を切り倒すだけ。刃物でやってもいいけれど……
「ブリジット、風魔術でヒクイ草を切り倒してもらってもいいですか？」
「お任せくださいませ！【ウインドエッジ】！」
ヒュガッ！
ブリジットの手から飛び出した真空の刃がヒクイ草を切り倒した。根から離れ、すぐに動かなくなるヒクイ草。あとは素材である葉っぱを千切っていけばいい。
「ありがとうございます、ブリジット。助かりました」
「このくらいお安い御用ですわ！」
「……アリシアはともかく、ブリジットは順応早すぎだろ……」
胸を張るブリジットにねぎらいの意味を込めて頭を撫でる。やっぱりブリジットの風魔術は素晴らしい威力だ。
さて、ヒクイ草の葉を千切って瓶の中に入れていく。
作業を見ていたレンが声をかけてくる。
「おれたちも手伝うか？」
「気持ちはありがたいんですが、成長したヒクイ草は触ると指が凍ってしまうんです。手袋をしていない二人には手伝わせられません」
「ああ、それで手袋してるのか。……っていうか、そもそもお前は寒くないのか？」
「調合師をしていれば、このくらいは日常茶飯事です。レンもすぐに慣れますよ」



「お前は調合師をなんだと思ってるんだ」
レンはまだ十二歳。私と同じ年になる頃には、きっとヒクイ草の処理なんて厚着しなくてもできるようになるだろう。
「さすがアリシアお姉さまです！」
「お前はアリシアのことになると途端に盲目的になるよな、ブリジット……」
ブリジットの元気のいい言葉にレンが突っ込みを入れているのを聞きつつ、作業を続ける。
キリハキダケとヒクイ草の葉を入れた瓶に手をかざし……
「【調合】！」

『冷却ポーションV』：周囲の温度を下げるポーション。とても高い効能。

瓶の中には、青灰色の液体が詰まっていた。液体の一部が霧状になっていて、瓶の内側をわずかに曇らせている。また、角度を変えると瓶のあちこちが光を放つ。これは極めて小さい氷の粒が太陽の光を反射しているからだ。上空の雲をそのまま瓶の中に詰めればこうなるだろう、という見た目である。
「できたのか？」
「はい。これで完成です」
駆け寄ってくるレンに瓶を見せると、レンは難しそうな顔になる。

「これが冷却ポーション……聞いたことないな」
「レン様も初めて見るポーションですの？」
「ああ。アリシアのオリジナルポーションはいくつも見たが、これには見覚えがない」
同じく駆け寄ってきたブリジットの疑問に答えつつ、首を傾げるレン。
「まあ、これは王都にいた頃に作ったものですから」
「王都にいた頃っていうと、ボスと出会う前とかか？」
「そうですね。お母様の病気を治すためにいろいろと研究をしていまして、その過程で作ったものです。冷やして保管したい素材があったので」
お母様の病気を治す研究における副産物のようなものだ。
「お前それ、当時十歳にもなってなかったんじゃないのか？」
「そうですね。懐かしい話です」
「お前……はあ、もういいや。アリシアだもんな」
「お姉さまは昔からすごい方だったんですのね！」
「結局これを用いた研究も無駄に終わってしまったわけですし、そこまで言われるほどではありませんよ。これができたのもほとんど偶然のようなものでしたし」
二人の言葉に苦笑を浮かべながら、私は庭に横たわるヒクイ草を見る。
ヒクイ草の葉はまだまだたくさんある。もちろんディーノさんからの依頼用にあといくつか冷却ポーションを作らなくてはいけないけれど、それでも余ってしまうだろう。

この辺りはあまり気温が変わらないとはいえ、最近は少しずつ暑くなってきていることだし……
「せっかくですから、冷却ポーションを使って氷菓でも作りますか？　ランドに美味しい水を出してもらって、それを凍らせれば簡単にできます」
大きな氷を作って、それを削ってミルクや蜂蜜をかけて食べる。氷が貴重な王都なんかでは大人気のおやつだ。
「氷菓！　とっても素敵な提案ですわ！」
「あれって貴族が食うような高級品じゃなかったか？　いいのかよ――って、自前で氷が作れるならタダ同然でできるのか。アリシアと一緒にいると常識が壊れるな」
ヒクイ草を冷却ポーションに変え、ディーノさんに納品するぶんを確保してから、余ったうちの一本を使って氷菓を作る。もちろん閉店後だ。氷菓は店の全員に好評で、しばらく定期的に作ることが決まるのだった。

▽

翌日、客足の落ち着く時間帯にディーノさんがやってきた。店の横で待っていた私は、ディーノさんがやってきたのに気付いて手を振る。
「ディーノさん、こんにちは」
「おう、アリシアちゃん。わざわざ店の前で出迎えなんてしなくてよかったんだぜ？」

「少し事情がありまして」
「？」
「とりあえず、こちらに来てください」
ディーノさんを先導し、店の入り口を通りすぎて敷地内の庭までやってくる。まだ屋敷の中には入らない。そのことにディーノさんは違和感を覚えたようだけれど、そのまま話を進めてくれる。
「で、言われた通り来たが……本当にブツは一日でできたのか？」
「はい、できましたよ。これがランクⅤの冷却ポーションです」
私が手渡したポーション瓶を受け取り、ディーノさんは瓶をしげしげと眺める。
「効き目はどのくらいなんだ？」
「ランクⅤのまま使った場合、瓶の蓋を開けて地面に置くだけで、この屋敷の庭程度の面積が雪の降る気温まで下がります。その状態を維持できるのは二、三日くらいでしょうか」
下がる温度や維持期間は元の気温によって変わるので断定はできないけれど、だいたいそんなところだろう。
「と、とんでもない代物だな……だが、それじゃ効きすぎだ。水竜の餌を冷凍し保管するのには、小部屋一つがじゅうぶん冷えればいい」
「それならランクⅣで問題ないと思います。それはお試し用として差し上げますから、一度試してみてください」
私が言うと、ディーノさんは首を横に振って苦笑した。

「いや、いいよ。アリシアちゃんの作ったポーションなら疑う理由はないしな」
「いいんですか？」
「ああ。魔物除けに成長促進ポーション……アリシアちゃんのポーションのすごさはよく知ってる。他の調合師ならともかく、アリシアちゃんなら問題ないと思ってる」
「あ、ありがとうございます」
「報酬のビーストフラワーはあとでうちのもんに届けさせる。少し待っていてくれ」
「わかりました」
「いよいよ西大陸との交易に現実味が出てきた……！　ありがとな、アリシアちゃん！」
明るい笑みを見せるディーノさん。新しい商売ができることへの強い喜びが感じられる。
「本当ならすぐに戻って海運事業を進めたいが……レシピを教えてもらうか、アリシアちゃんに作ってもらうか、そのあたりについて話を詰めておかないとな。一応契約書の草案は作ってきたが、確認してくれるか？」
いくらランクⅤの冷却ポーションが強力とはいえ、今日渡すぶんだけで永遠に冷凍室状態を保てるわけではない。海運事業を成り立たせるには安定した供給が必要だ。レシピを私が握っている以上、今後のことを取り決めておく必要はあるだろう。
私は頷いた。
「それなら丁度いいですね」
「丁度いい？」

契約関連の話をするなら応接室がいいだろう。少なくとも庭でする話じゃない。
「実はディーノさんにご相談したいことがありまして。そのために屋敷の手前でお話をさせていただいたんです。話がごちゃごちゃしてしまいますから」
「……？」
「ついてきてください」
私は屋敷の中に入り、ディーノさんを扉の内側から手招きした。ディーノさんは疑問符を浮かべながらついてきて、すぐに目を見開いた。
「うおっ、涼しいな。明らかに庭とは温度が違う」
「実はランクⅡまで薄めた冷却ポーションを使っているんです」
「冷却ポーションを？」
「廊下の隅に蓋を開けた冷却ポーションの瓶を置いてあるんですよ。ほら、あそこ」
私の指さす先には蓋を開けて中身を少しずつ気化させている冷却ポーションの瓶があった。ランクⅡまで薄めた冷却ポーションは、水を凍らせるほどの冷気を出すことはできないけれど、こうして室内をひんやりさせることができるのだ。
「私はあまり気にならないんですが、このあたりの気候でも最近は暑いと感じる人が多いらしくて。需要があるんじゃないかという意見が出たので、実験しているんです」
ちなみにそう言ったのはルーク。昨日みんなで氷菓を食べているとき、ルークがふと「これってランクを落とせば暑い部屋を涼しくすることができるんじゃない？」と呟いたのだ。

私はこのポーションを単に素材の保存用としか考えていなかったので、思わず感心してしまった。
「そうか！　言われてみればその使い方もある！　なんで気付かなかったんだ……！」
口元を押さえるディーノさん。さらに勢いよく私の肩を掴んで揺さぶってくる。
「アリシアちゃん、これはすごいことだぞ。この辺りじゃ暑さはたいしたことないが、南大陸との間にある島々なんかじゃ年中蒸し暑さに苦しめられる場所も少なくない。日差しがキツい南大陸まで運べば、飛ぶように売れるだろう。どんな強気な値段にしても王族貴族はこぞって欲しがるはずだ！」
「わ、私は南大陸に行ったことはありませんが、確かに暑さが厳しいそうですね」
「ああ。水竜の餌を保存するためだけに使おうと思っていたが……アリシアちゃん、このポーションのレシピをスカーレル商会に公開する気はないか？　レシピを教えてくれれば毎年使用料を支払う。誓ってアリシアちゃんの足元を見るような金額にはしない」
ディーノさんは商売のことで嘘は吐かない。冷却ポーションに価値を感じているなら、必ず私が納得できるような額を用意してくれるだろう。スカーレル商会にレシピを公開することはルークたち店のメンバーには伝えてあるし、断る理由はない。
「わかりました」
「よっし、そうこなくちゃな！　こりゃ忙しくなりそうだ！」
ディーノさんはそう言いながら、やはり楽しそうに笑みを浮かべた。

ディーノさんとの商談を終え、見送りを済ませたあと、店の様子を見に行く。
時間帯のせいか客入りはまばらだ。私は商品補充をしているルークに声をかける。ちなみにランドは定位置のカウンターの上だ。
「ルーク、なにか問題はありませんか？」
「特にないよ。アリシアのほうは、ディーノさんとの話し合いは終わったのかい？」
「無事終わりました。水竜の餌としてだけではなく、室温調整用としても価値を認めてもらえましたよ。しばらくうちとスカーレル商会とで独占的に販売していくことになります」
「またとんでもない利益になりそうだね……」
「ルークのアイデアのおかげです。私は冷却ポーションを室温の調整に使うなんて発想はありませんでしたから」
「大したことはしてないよ。アリシアのとんでもないポーションがすごいんだ」
さらっと流すルーク。本人がこう言っているのにお礼を言い続けるのもよくないだろうから、仕方なく謙遜を受け入れておく。
「……」
「ルーク、どうかしましたか？　なにか言いたそうですが」
「あー、いや、その……」
「？」
「……ディーノさんからなにか聞いてない？　冷却ポーション以外のことで。忠告みたいな感じの」
「忠告……？　いえ、特になにも聞いてませんよ。ディーノさんは海運事業や南大陸との交易について考えるのに夢中なようでした」
「あの人……」
呆れているようなルークの溜め息。どうしたんだろう。
私が首を傾げていると、ルークは珍しく言いにくそうに告げた。
「実は昨日、夜にディーノさんに出くわして少し話したんだ」
ルークはたまに夜、一人で散歩に出かけることがある。どうやらそこでディーノさんと遭遇したようだ。
「で、そのときにアリシアに伝言があるって聞いたんだけど……忘れていたみたいだね」
「はあ……ルークは一体どんな内容だったか聞いていませんか？」
ディーノさんのことだから、構想している商いが進みそうになって、そっちに意識を持っていかれてしまったんだろう。
ルークは声をひそめて言った。
「――第一王子に気を付けろ、だってさ」
「第一王子……？」
「ああ。どうしてディーノさんがそんなことを言おうとしていたのかは俺にはわからないけどね」
第一王子というのはこの国の第一王子のことでいいんだろうか。以前王都に住んでいたことはあ

れど、私は面識がない。
「なぜそんな人物に気を付ける必要があるのでしょうか」
「……」
「ルーク？」
「……いや、なんでもない。アリシアは呪詛（カース）ヒュドラ討伐に貢献したこともあって、名前が広まりつつあるからね。誰に目を付けられてもおかしくないかもしれない」
そう言うルークは、口調こそいつも通りなのに表情は険しく見えた。

▽

ディーノとアリシアの商談から半日時を戻した夜。
「――それで、ここ数日うちの店を見張っていたのはなんの目的かな？」
「ぐ、ぐうっ……！」
トリッドの街の路地裏にて、ルークは黒い服を着た男を引き倒して尋問を行っていた。
男は何日もの間、「緑の薬師」を見張っていた。ルークはそれを察知し、逆に相手をとらえたのだ。
近付くまでは問題なかったものの、捕まえる寸前で男はルークに気付き逃げ出そうとしたため、こうして力ずくで押さえ込んでいる。

「『緑の薬師』で販売されるポーションの多くはアリシアのオリジナルか、うちやスカーレル商会以外では売られていない珍しいものばかり。レシピを盗み出そうとする輩（やから）は今まで何人も捕まえてきたけど……」
「……」
「どうも君はそういう連中とは違うようだ。気配の消し方、俺に見つかったときの迷いのない逃げ足。どちらも素人（しろうと）離れしている」
「な、なんのことかわからない。なにか誤解をしていないか？　俺はただいきなり声をかけられて驚いただけだ」
男は動揺したように言うが、それが一般人を装う芝居であることがルークにはわかる。【交渉】スキルを用いて相手から情報を引き出そうとしているのに、効いている様子がないからだ。尋問に対抗する特別な訓練を積んでいなければできることじゃない。
「つまらない言い訳だ。衛兵のところまで連れていこうか」
「好きにすればいい」
「ずいぶん余裕があるね。……王家の家臣であることを示すこの指輪があるからかな」
「……ッ!?」
ルークが男の懐（ふところ）から指輪を取り出す。精緻（せいち）な意匠が刻まれた指輪だ。それによって初めて男の表情に本物の焦りが見えた。
「確かにこれがあれば衛兵に捕まっても言い訳がきくだろうね。牢屋に入る必要もない」

「貴様、何者だ。なぜ指輪のことを知っている」
「ただのポーション店の従業員だよ。そういう君は王家直属の密偵だね。アリシアを探りに来たのかい？」
「それは……」
「誤解しないでほしいけど、俺が指輪について知っているのはただの偶然だよ。昔一度見たことがある。それに、君の仕事を邪魔するつもりもない。王族に盾突くつもりなんてないからね。明日以降も好きなだけアリシアを観察すればいい」
「……なにが目的だ？」
「俺は一つ聞きたいだけだよ。君にアリシアを探らせているのは国王と第一王子、どちらだい？」
「……」
「答えてくれれば君のことは他言しないよ」
男はしばらく黙考したのち、口を開く。
「……国王陛下だ」
「そうか。ありがとう」
ルークが男を解放すると、男は夜の闇に紛れるように去っていった。
それと入れ替わるように足音が聞こえてくる。
「見事な手際じゃねえか。国王陛下から勅命を受けた密偵をあっさり捕まえるとは」
「あなたは……スカーレル商会の商会長？」

「ディーノだ。そっちは確かルークだったか？　よろしくな」
現れたのは金髪と洒脱ないで立ちが特徴の男性、ディーノ・スカーレルだった。
ルークは視線を鋭くする。
「ここにいるのは偶然ではなさそうですね」
「どうしてそう思う？」
「ここ数日、スカーレル商会の人間が数人『緑の薬師』周辺に張り込んでいるのを見かけました。アリシアと面識のあるあなたが、わざわざ遠巻きに監視する必要はないはず。それなら張り込みの理由は、アリシアを探っている何者かを見つけ出そうとすること以外にありません。違いますか？」
ディーノは、ふむ、と顎に手を当てた。
「……なんかお前、鋭すぎて可愛げないなぁ……ちょっと引く……」
「あなたが聞いたんじゃないですか」
ルークは呆れたような声で言った。同時に肩の力を抜く。目の前の人間には、明らかに敵対の意志はない。
ディーノは種明かしをするように言う。
「お前の言う通り、俺は部下に頼んでアリシアちゃんの周辺についてもらってた。呪詛ヒュドラの一件は王都でも噂になってたからな。慎重な国王陛下なら必ず動くと思ってたんだ」
「密偵の動向をあなたが気にする理由にならないのでは？」
呪詛ヒュドラ討伐の立役者となったアリシアについて、国の主導者が情報を求めるのはある意味

当然だ。単に呼び出すのではなく密偵を放ったのは、取り繕った状態ではないアリシアを観察したいからだろう、とルークは推測している。
国王からはアリシアに害をなす意図は感じない。
仮になにか強硬な手段を採るとしたら、動かしている人員はもっと多いはずだ。
「お前と同じだよ、ルーク。密偵が本当に国王陛下からなら問題ない。だが万が一、第一王子の手のものだったらまずいことになるかもしれない。だから警戒したのさ。杞憂だったみたいだけどな」
「……」
「で、お前はどうして第一王子について知ってるんだ？　例のスキルについても知ってるのか？　ってか俺、お前のことを前にどっかで見たことがあるような気がしてるんだよなあ」
ディーノの目がスッと細められる。それはただの凝視とは異なるものだった。装った表面に惑わされず、じっと本質を見通す視線。一流の商人特有の別次元の観察眼だ。
普通の人間なら、動揺して冷や汗の一つでも流したことだろう。
しかしルークは呼吸すら乱さず、にっこりと笑みを浮かべた。この程度の視線には慣れている。
「俺は以前王都にいたので、噂を聞いたことがあるだけですよ。あなたとも、その時期に街ですれ違ったことがあるのかもしれませんね」
ディーノが渋い顔になった。
「……お前めちゃくちゃ胡散臭いな。笑顔の質が詐欺師に近いぞ」

「誰が詐欺師ですか」
抗議しつつも、ルークは内心で感嘆していた。
圧のある視線に、気の抜けた言葉。ディーノは複数の角度からルークの反応を引き出して、どんな人間か見定めているのだ。このあたりはさすが大商人といったところだろうか。
「まあいいや。お前が近くにいるなら、アリシアちゃんもそうそう危ない目に遭うことはないだろ」
「ずいぶん簡単に信用しますね」
「国王直属の密偵をあっさり制圧する実力があって、密偵を脅して情報を聞き出すくらいアリシアちゃんの安全に気を遣ってる。信用するには十分だろ。アリシアちゃんにうちの腕の立つ部下を貸し出すつもりだったんだが……必要なさそうだな」
「もしかしてこの街にはそのために？」
「それもある」
ディーノは頷く。海運事業に必要な冷却ポーションの開発依頼は、あくまでトリッドの街に来た用件の半分でしかない。名前が広まりつつあるアリシアの様子を見つつ、必要なら護衛をつけることも目的の一つだった。
ルークはディーノに言う。
「アリシアの安全を最大限考えるなら、スカーレル商会で囲うのが一番確実だと思いますが」
「アリシアちゃんが遠慮するんだよ、それ」

「あなたなら言いくるめることも可能でしょうに」
「エリカがそばにいる。最悪の場合はあいつが動くだろう。……俺は俺でアリシアちゃんを守るためにやることがあるからな」
「……？」
「俺はここ数年、スカーレル商会の国外への影響力を強めるよう動いていた。海運事業もその一つだ。商会の活動範囲が他国に広がれば、ポーションの輸出先が増える。アリシアちゃんからレシピを教わったポーションは珍しいし効果が高いから、国外でもバンバン売れるだろう」
ルークは目を見開いた。
「他国でアリシアの名前が広まれば、この国の王族ですらアリシアに手を出しにくくなると？」
「そういうことだ。アリシアちゃんはあくまでこの国の人間だから、可能性は低いとはいえ、国王陛下によって王宮に召し上げられてポーション作りを命じられることもありえる。だが、他国の有力者たちがアリシアちゃんを重要視すればそういう事態も牽制できる」
他国がアリシアに関心を持つ中、国王が王宮にアリシアを召し上げれば、不要な緊張を招く可能性がある。戦争の道具としてポーションを生産しているのでは、と疑われるからだ。そうなればアリシアの扱いは国王も慎重にならざるを得ない。
あるいはもっとストレートに、スカーレル商会を重用する国にアリシアを亡命させることもできるとほのめかすだけでも、王家の動きを制限できる。
いずれにしても、アリシアの価値を他国に知らしめることは、アリシアの身を守ることにつながるのだ。
「……スケールの大きな話ですね」
「正直、アリシアちゃんの力を隠し切れるならそのほうがよかったんだがな」
ディーノは溜め息を吐き、それから真剣な表情を浮かべる。
「勝手な話だが、俺はアリシアちゃんのことを娘同然に思ってる。アリシアちゃんを守るためなら、スカーレル商会を世界一の大商会にだってしてみせるさ」
ニッと笑うディーノに、ルークは感心半分呆れ半分の気持ちになる。
どうやら前代未聞の海運事業に乗り出したのも、スカーレル商会の影響範囲を広げ、アリシアのポーションを売り込むためだったようだ。
「というわけで、俺は忙しい。アリシアちゃんの護衛はお前がしっかりやれよ、ルーク」
「もともとそのつもりです」
「困ったことがあればエリカに頼れ。あ、あとアリシアちゃんには、一応第一王子に注意するよう言っとくように」
「それは自分で言ってください。俺はアリシアの護衛はしますが、あなたの命令には従いませんよ」
「まあそれでもいいか。つーかお前、アリシアちゃんと一緒に暮らしてんだよな。……お前アリシアちゃんに手ぇ出したらどうなるかわかってんだろうな」
「出しませんから詰め寄ってこないでください」

ハーッと拳に息を吹きかけるディーノにルークは溜め息を吐く。そんなルークの様子に「絶対だぞ、アリシアちゃんになにかしたらタダじゃおかねえからな」と再度念を押し、ディーノはその場から離れようとする。

去り際、ディーノは背中越しに呟く。

「ここは暗いな」

「……？」

「だから見間違いかもしれねえ。そのうえで聞け。俺はお前に似たやつを――いいや、似たお方を知ってる。なあ、本当にお前が俺と話したのは、今日が初めてか？」

「――っ」

初めて、ルークの呼吸がわずかに乱れた。今ディーノは背を向けているが、ルークの動揺を見逃してくれることはないと確信できる。それでも、ルークは半秒かからずいつも通りに戻った。

「――ええ、初めてですよ。そう言ったじゃないですか」

その声色は完全に平静を取り戻していた。ディーノはがっくり肩を落とし、負け惜しみのように叫んだ。

「お前本当にかわいくねーな！　じゃあな！」

「お気をつけて」

微笑を浮かべたルークに見送られ、ディーノは足音荒く路地裏へと消えていった。一人取り残されたルークは、ぼそりと呟いた。

「……油断した。あの人、ちょっと師匠に似てたのがよくなかったな」

▽

「できました！」

私はできたばかりのポーションを掲げて声を上げる。

近くで調合作業をしていたレンが視線を向けてくる。

「商会長にもらった素材で作ったポーションか？　確か『ビーストフラワー』だったか」

「そうです。あくまで試作品ですけどね」

冷却ポーションを提出した翌日、私は報酬としてスカーレル商会長ディーノさんから稀少素材のビーストフラワーを受け取った。この大陸と南の大陸の間に位置する島国で入手したそうで、私も見たのは初めてだ。

もらったときには大人しくなっていたけれど、ビーストフラワーは本来鋭い棘が内側に生える花で、近付いたものに噛みつくらしい。

……ちょっと見てみたかった。

「お姉さま、そのポーションはどんな効果があるんですの？」

同じく工房内にいるブリジットもやってくる。

「飲むと五感が鋭くなるようですね」

「……それ、お前が欲しい素材とは違ったんじゃないか？　確か母親がかかってた病気を癒やすポーションを作りたくて、稀少素材を集めてるんだよな？」

レンからの冷静な言葉。

「そうですね。この素材にもいろいろ使い道はあると思いますが、おそらくどう扱ってもお母様の病気を癒やすポーションにはならないでしょう」

「そうですねって……お前、あんまり落ち込んでないのか？」

「期待していなかったと言えば嘘になりますが、もともと簡単な道のりだとは思っていませんから」

私が触れたことがない稀少素材なんて、世界中に数えきれないほどある。一つ目で目当てのものに当たるなんて、いくらなんでも都合がよすぎるだろう。

「目的はあくまでお母様の病気を癒やすポーションを作ることですが、その過程も楽しむつもりです。せっかくいろんな珍しい素材を使ってポーションを作れるわけですから」

「そっか。それがいいかもな」

そう言って頷くレン。もしかすると、励まそうとしてくれたのかもしれない。

「ありがとうございます、レン。気遣ってくれたんですね」

「……別に。それよりそのポーション、五感が鋭くなるんだっけ？　いろいろと使い道がありそうだな」

「魔物が近付くのを感じ取ったり、ひったくり犯を追跡できたりしそうですわね！」

レンとブリジットの二人がビーストフラワーで作ったポーションの使い道を挙げていく。よく思うけれど、この二人は年のわりに賢いような気がする。

「では、飲んでみましょう」

私はポーション瓶に口をつける。実際に飲むのは初めてなのでランクはⅢまで薄めてある。

「それでアリシア、そのポーションの名前は？」

「『獣化ポーション』です」

……ん？

なんだか頭の上のほうがむずむずしてきたような。

そんなことを考えていると……にょきっ。

「うおっ」

「お、お姉さまから猫の耳が生えましたわ！」

頭の上のほうに手をやると、なんだかふわふわした感触がある。なるほど、獣化ポーションというのはこういう意味ですか。薄める前に見たポーションの鑑定結果は「獣のごとき五感を得るポーション」だったけど、まさか本当に体の一部が獣になるとは。

「今の私には猫の耳が生えているんですか？」

「はい！　とっても可愛いですわ！　ね、レン様！」

「なんか空想上の変な生き物みたいになってるな」

「レン様もお姉さまの魅力にうっとりしていますわね！」

「アリシアじゃなくてお前の耳がどうかしてるぞ……」

ブリジットは「鏡を持ってきますわね！」と工房を早歩きで出ていった。なぜ早歩きかというと、工房内で走るとレンが即座に怒るからである。埃が立ってポーションに混ざる可能性があるからだ。

「ちなみにアリシア、人間の耳は残ってるのか？」

「えっと……ありますよ。音も聞こえます。頭頂部の猫の耳は飾りみたいなもののようです」

「五感の強化ってのはどんなもんだ？」

「かすかにですが、ブリジットが自室の扉を閉めてこっちに向かってくる音が聞こえます」

「工房から上の階の音が聞き取れるのか……なかなか強力だな。ランクが上がれば五感がさらに強くなるのか、持続時間が伸びるのか検証する必要があるな……」

調合師の顔で唸るレン。

「ちなみに聴覚だけでなく嗅覚も上がっています。レンが前にあげたアロマポーションを使ってくれているのがわかりますよ。気に入ってもらえたようでなによりです」

おそらく部屋で香りを楽しんでいたら、服にそれが移ったんだろう。

「……そりゃ、もらったんだから使うだろ。深い意味なんてない」

「？　はい」

「お待たせしましたわ！」

そんなやり取りをしていると、手鏡を持ってブリジットが戻ってきた。鏡で確認すると、確かに私の頭のてっぺんから生えているのは猫の耳だった。黒猫っぽい三角形の耳だ。

立ち読みサンプル
はここまで

「あと、途中でルーク様に声をかけられましたわ。なんでもオルグ様がお店にいらっしゃっていて、お姉さまにポーションのことで話があるそうです」

「オルグが……？　わかりました、行ってきます」

話というのがなにかわからないけれど、とりあえず聞くだけ聞いてこよう。

「……なあブリジット、問題ないと思うか？」

「なにがですか？」

「いや、オルグが今のアリシアを見たら……」

工房から出る直前レンとブリジットがなにやら話していたけれど、一体どんな内容だったんだろう。首を傾げつつ店に向かう。裏手から入って店の中へ。目立つ赤髪の青年の姿を探すと、カウンターに立つルークやランドと談笑している。

……オルグとルークが話していると異様に目立ちますね。

店内の女性客が二人を食い入るように見ているのがわかる。さすがトリッドの街が誇る美男子二人。

「オルグ、私にポーションのことで話があるとのことですが」

「ああ、アリシぁあああ!?」

私に気付いてこっちを向いたオルグが目を見開いた。その視線は私の頭頂部に生えた猫の耳に注がれている。当然気になりますよね。

「猫耳……あ、もしかしてそれ、例の稀少素材で作ったポーションの影響？」